

尹致昊と朝鮮の近代：東アジアにおける知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール

著者	柳 忠熙
学位授与年月日	2016-11-24
URL	http://doi.org/10.15083/00075394

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 柳 忠熙

本論文「尹致昊と朝鮮の近代——東アジアにおける知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール」は、19世紀から20世紀へといたる近代朝鮮の大きな転換期を生きた尹致昊^{ユンチホ}（1865～1945）を主要な研究対象とし、東アジアの知識人としての尹致昊が、儒学ないし漢学によって培われた自身の知識と思想を、近代ヨーロッパの言語や学術を学ぶことによってどのように再編し、新たな近代国家へと向おうとしたのかについて、「知識人エトス」と「啓蒙のエクリチュール」という視点から論じたものである。

尹致昊に関しては、おもに1970年代以降の韓国において重要な研究が積み重ねられてきたが、その多くは、1876年の日朝修好条規締結から1910年の日韓併合にいたる時期（開化期）に形成された彼の思想と併合以降の植民地期における彼の「親日」の論理との関連に問題意識を置き、その結果、尹致昊が「反民族的」知識人となった原因を探るといようなナショナリズム的言説に回収されてしまう傾向があることは否めない。一方で、尹致昊を近代的な自由主義者としてとらえなおそうとする研究も行われているが、ナショナリズムにせよ自由主義にせよ、近代以降の思想をそのまま基準にして尹致昊の思想と実践を解釈しようとする点に変わりはない。本論文は、当時の歴史的・文化的・思想的な諸文脈を立体的に考察した上で、知識人としての尹致昊に、士大夫的エトスと市民的エトスとの2つの方向を見出し、また、そのはざまに生み出された多様な言説を精緻に分析することで、尹致昊の思想と実践に総合的な理解を与え、朝鮮ひいては東アジアにとって近代とはいかなるものであったかという問いに答えようとする。

全体は、序章と終章を含めて全9章から構成され、第1章から第7章までの本論は、3つの部に分けられている。

第1部「朝鮮知識人と西洋体験」は、第1章「尹致昊の海外経験と英語学習——東アジアの辞書学と朝鮮知識人の英語リテラシー」、第2章「漢詩文で〈再現〉された西洋——『海天秋帆』『海天春帆小集』『環瑠唵艸』と理想郷の修辞」および第3章「英文で〈再現〉された西洋——「日記」に記されたヨーロッパと朝鮮使節の文化ダイナミズム」からなる。ここでは、おもに尹致昊および周囲の知識人の海外体験とそれが生み出したテキストに焦点が合わせられる。新たな世界が翻訳や漢詩によって〈再現〉されると同時に、旧来の表現には見られない分岐や転換があらわれていることが、従来は論じられることのなかった文献の精密な分析によって検証され、朝鮮知識人の思想や世界観にどのような動きが起きていたのかが、明らかにされる。

第2部「尹致昊の政治思想の変容と自由思想」は、第4章「尹致昊の改革と啓蒙の論理——主

権をめぐる政治思想の変容」および第5章「尹致昊の啓蒙思想とキリスト教的自由——福沢諭吉の自由観と宗教観の比較を通じて」からなる。ここでは、啓蒙という観点から、尹致昊のおもに開化期の思想の特徴が明らかにされる。伝統的政治思想や福沢諭吉の思想との比較によって、尹致昊における宗教という問題の重要性が可視化され、尹致昊がキリスト教の有効性を儒教の無効性と対比して強く意識していたことが指摘される。

第3部「朝鮮の近代と啓蒙のエクリチュール」は、第6章「朝鮮開化期の民会活動と「議会通用規則」——「議会通用規則」の流通と翻訳様相を中心に」および第7章「自助論の政治的想像力と三・一運動——1910年代後半における尹致昊と崔南善の自助論を中心に」からなる。尹致昊が、討論の実践とその組織という観点から「民会」を捉えていたことが明らかにされ、また、サミュエル・スマイルズの「自助論」に対する視線の違いを尹致昊と崔南善の間に見出すことで、植民地朝鮮の知識人における政治的实践と政治的想像力の問題についても、分析が加えられる。

なお、序章「近代東アジア／朝鮮の知識人」では、先行研究を概観した中で、本論文の問題意識がどこにあるかが明確に示され、終章「近代東アジアのダイナミズムと尹致昊」では、近代東アジアのダイナミズムを理解するための視点として尹致昊が有効であることを改めて確認し、今後の研究への展望が示される。

以上のような構成と内容をもつ本論文は、尹致昊にかかわる事跡や文献の研究それ自体として高い水準をそなえているのみならず、知識人としての尹致昊のありかたを近代東アジア全体の問題としてとらえなおした点で、従来にはない展望を開いたものとして評価できる。前者については、漢文・英文・国文（ハングル文）で書かれた尹致昊の日記を基礎資料として丹念に読解した上で他の資料と結び合わせ、全体的な文脈を明らかにしたこと、等閑視されがちな尹致昊の漢詩や翻訳活動を再評価し、書くことによって実践を行う知識人のすがたを示したことなどは、今後の尹致昊研究が必ず参照すべき貢献である。後者については、士大夫的エトスと市民的エトスという近代東アジアに広く見出しうる思考の類型を抽出したことによって、「親日」かそうでないかといった議論から離れて、近代東アジアという視野において尹致昊の思想と実践を理解する道を拓いたことは、大きな功績である。

審査委員会では、論文のこうした成果を認めつつ、英語文献の扱いにおいて正確さに欠ける箇所が見られること、近代東アジアにおける言語と宗教の問題の扱いがやや表面的であること、「エクリチュール」や「エトス」など論文の根幹をなす概念についてはさらに考察を深める必要があることなどが指摘されたが、これらは本論文の学術的価値を損なうものではないことも確認された。

よって、本審査委員会は、本論文が博士（学術）を授与するにふさわしいものであることを、一致して認定した。